

アヴァンギャルド・チャイナ展ついに開催。作家も来てます。

2009年04月03日

愛知県美術館の4月最初の展覧会、アヴァンギャルド・チャイナ展がいよいよ、オープンしました。

開催が危機に陥ったこともある展覧会ですので、担当学芸員の感慨もひとしおですっ。



↑10台のスクリーンを使う楊振中（ヤン・ジェンジョン）さんの作品

今回の展覧会に合わせて、出展作家である張培力（ジャン・ペイリー）さんと楊振中（ヤン・ジェンジョン）さん、孫原（スン・ユアン）さんに加え、フランス在住の中国美術評論家、費大為（フェイ・ダウェイ）さんが来日されました。中でも孫原（スン・ユアン）さんは、出品作《老人ホーム》の状態が気にかかるようで、展覧会が始まってからも熱心にメンテナンスをされています。



↑ 今回の目玉作品の一つ 《老人ホーム》



↑ 作品の状態を確認する孫原（スン・ユアン）さん

さて、この快活な孫原（スン・ユアン）さん、実は世界を震撼させた「死体派」を代表する作家さんです。

「死体派」とは、90年代に中国に登場した現代美術の傾向の一つです。身体が存在、生死の問題を極限まで突きつめた「死体派」の作家さんは、動物や人間の死体を素材に使う作品制作をします。例えば孫原（スン・ユアン）さんは、雪原に血の滴るヤギの背骨200本を置いて《羊飼い》（1998年）という作品を制作しています。恐ろしい風景ですが、血と骨と雪の奏でる色と形のコントラストに美しさも感じてしまいます。どこか寓話的な雰囲気も漂いますね。

そんな孫原（スン・ユアン）さんですが、ご本人はいたって気さくで感じの良い方。5日の午後には「アーティスト・トーク 孫原（スン・ユアン）に聞く」というイベントも行われます。直接、彼の話聞いてみたい方はこのチャンスをお見逃しなく！！

(F.N)